名古屋大学全学教育
「英語新カリキュラム」の概要及び若干の考察

長　畑　明　利

＜要　旨＞

本稿の目的は、平成 21 年度から名古屋大学の全学教育に導入されることになった英語新カリキュラムの概要を紹介することにある。今回のカリキュラム改革は、平成 15 年度に現行カリキュラムが導入されて以来６年ぶりのものであるが、そこでは、①「世界に通用する尺度」の導入、②「積み上げ方式」による英語教育、③ 英語力の底上げ及び最低限の出口保証、④ 成績上位者のより高いレベルへの誘導、⑤ 英語による学術論文の読解・執筆・発表の能力の育成をはかることがうたわれ、それらの実現のために、① 検定試験の一斉受験、② １年前期の習熟度別クラス編成、③ ｅラーニング教材を用いた課外学習による学習量の増加、④ パラグラフ・リーディング、パラグラフ・ライティング、プレゼンテーションを中心内容とする授業の実践が行われることが示されている。新カリキュラムは、国際化への対応と学術的活動に資する英語力の育成を目指すものであり、従来の教養主義的性格が希薄になるとはいえ、21 世紀の研究拠点大学である名古屋大学にふさわしいものと言えるだろう。

１．はじめに

名古屋大学の全学教育では､平成 21 年度から英語の新カリキュラムを実施することになった。現行カリキュラムは平成 15 年度に開始されたので、６年ぶりの改訂となる。以下に新カリキュラムの概要を紹介し、現行カリキュラムとの相違を含め、その特徴を述べる。

名古屋大学教養教育院言語文化科目部会・主査
名古屋大学国際言語文化研究科・教授

2．新カリキュラム導入の背景と基本方針

今回の新カリキュラムの基本方針は、種々の議論を経て、平成 20 年 3 月に「全学教育検討 WG」が提出した「英語教育の改善について－国際基準の英語力を目指して－（報告書）」に示された[1)]。同「報告書」は平成 20 年 4 月の役員懇談会にて検討され、平成 21 年度より新カリキュラムを実施するという方向性が示された。これを受け、平成 20 年 4 月に「英語教育改善に関する実施体制 WG」が設置され、実施案の検討が開始された。

上記「報告書」は、冒頭、「名古屋大学の学生、卒業生の英語の実力が不十分ではないか、と指摘されだしてから久しい」と述べ、また、「最近の学生の入学時の英語の実力が、全体としては以前ほどのレベルに到達していないこと」、「入学者の英語の実力・習熟度の差が拡大する傾向にあること」が、語学担当教員の実感として報告されていることを指摘している。今回の英語教育改善の背景に、学生の英語力低下と学生間の英語力の格差があるという説明である。そのうえで「報告書」は、「本学の学生に要求される英語力とは何か」を問い、その答えとして、「専門書を読み、論文を書き、また学会などで学術発表ができること、また、卒業して社会に出たときに種々の職場で仕事の道具として使いこなせること」を挙げている。「報告書」はさらに、こうした英語力の育成が目指されるべきであるにもかかわらず、「現実には、学力全体が低下し、英語もその例外ではない」とし、「名古屋大学における英語教育の品質保証が行われなければならない」と論じる（全学教育検討 WG、2008、1）。

こうした見解に続き、「報告書」は、具体的な英語教育の方針として、(Ⅰ) 大学入学当初の 1 年生の学力底上げを目指すこと、(Ⅱ) 学術論文の読解力と論文執筆能力の養成に主眼を置き、さらに、聴解と会話を含めたプレゼンテーション能力の要請を目指すこと、(Ⅲ) これらの能力を「段階別」に養成すること、(Ⅳ) 学部の専門教育、大学院教育において、専門的な学術論文読解力と論文執筆能力を磨くこと、をうたう（全学教育検討 WG、2008、1）。

これらの「背景」説明の後、「報告書」は新カリキュラム案の骨子を述べ、その具体像を示す（全学教育検討 WG、2008、2）。筆者の了解するところでは、全体の基本方針は次のようにまとめられる。すなわち、(1)「世界に通用する尺度」の導入、(2) 「積み上げ方式」による英語教育、(3) 英語力の底上げ及び最低限の出口保証、(4) 成績上位者のより高いレベルへの誘

導、(5) 英語による学術論文の読解・執筆・発表の能力の育成、である。また、「報告書」は、これらの方針を実現するための方策を示している。これも同様にまとめると、次の４点となる。① 検定試験（TOEFL-ITP、Criterion）の一斉受験、② １年前期の習熟度別クラス編成、③ e ラーニング教材を用いた課外学習による学習量の増加、④ パラグラフ・リーディング、パラグラフ・ライティング、プレゼンテーションを中心とした授業内容、である。

これらの基本方針と方策について、筆者の見解に基づき、また新カリキュラムの具体的内容に触れつつ、簡単にコメントしておく。まず、ここで基本方針 (1) とした「「世界に通用する尺度」の導入」であるが、従来より、英語授業の成績評価が名古屋大学のみで通用するにすぎず、学外では通用しないという意見があり、広く世界レベルで通用する評価尺度の導入が求められていたという背景がある。新カリキュラムにおいては、世界各地で用いられ、また定評のある検定試験（TOEFL-ITP 及び Criterion）の一斉受験が行われ、「世界に通用する尺度」が導入される。検定試験は１年前期のコース分けに用いられ、１年終了時に再度実施される一斉受験によって、学習の成果を見ることを可能にするものである。同時に、これらの検定試験を導入することによって、学生は個別授業における優良可不可の評価に加え、世界的に通用する尺度によって自身の英語力（あくまで、これらの検定試験によって測定できる英語力ではあるが）を知ることができる。また、後述のように、１年後期開講授業においては、これらの検定試験の成績を対面授業の評価の一部に加えることになっており、授業における成績評価においても「世界に通用する尺度」を部分的に採り入れることが意図されている。現行カリキュラムにおいても、「英語検定試験による単位認定制度」という制度があり、意欲ある学生が TOEFL、TOEIC その他の検定試験を受験し、それらの尺度による自身の英語力を認識する機会を持つことを奨励してきたが、新カリキュラムにおいては、全学生に対して検定試験を受験させる点が異なる。

次に、(2) の「「積み上げ方式」による英語教育」であるが、これは具体的には１年終了時に一定のレベルに到達した者のみが２年次の授業を受講できるという制度を、また、１年前期授業での学習内容を踏まえた上で、１年後期授業、２年前期授業の内容が考案されることを指す。

(3) の「英語力の底上げ及び最低限の出口保証」は、習熟度の低い学生の英語力を重点的に伸ばす試みと、一定のレベルに到達しない者は２年生

の授業を受講できないとする制度を指す。後者は、一定レベルに到達しない限り卒業必修単位を取得することができないことを意味する。新カリキュラム実施当初はレベルを比較的低く設定してあるが、必修単位取得のために一定の到達レベルを設けることはこれまでのカリキュラムにはなかったことである。

(4) の「成績上位者のより高いレベルへの誘導」は、習熟度の高い学生が現状に満足することなく、より高いレベルに到達するようさらに学習を進めることを奨励し、またそれを可能にする制度を構築することを指す。

(5) の「英語による学術論文の読解・執筆・発表の能力の育成」は、名古屋大学の学生に要求される英語力として示された「専門書を読み、論文を書き、また学会などで学術発表ができること、また、卒業して社会に出たときに種々の職場で仕事の道具として使いこなせること」のうち、特に前半部の実現に関わるものである。

これらの基本方針を実現するための方策として挙げた４点についても説明を加える。①「検定試験（TOEFL-ITP、Criterion）の一斉受験」は、すでに述べたように、入学時と１年終了時に TOEFL-ITP と Criterion 試験の一斉受験を行う試みである。習熟度別コース分けを行い、学生の学習効果（の一部）を測定する役割を担うが、同時に、これにより、「世界に通用する尺度」を導入し、成績評価の客観性を高め、学生の学習意欲を高めることも意図されている。

② の「１年前期の習熟度別クラス編成」は、入学時の検定試験の成績に応じて、全学生を A、B、C コースに分け、習熟度に応じた英語教育を行う試みである。習熟度の低い C コースの学生には、他のコースの学生よりも授業を一つ多く受講させ、英語力の底上げをはかる。また、習熟度の高い A コースの学生には、全学生必修の授業（「英語（基礎）」）を B、C コースの学生とは独立して受講させ、より高いレベルへの誘導をはかる（時間割編成上、これができない学部では、習熟度の高い学生を対象とした「特別英語セミナー」の受講を促す）。

③ の「e ラーニング教材を用いた課外学習による学習量の増加」は、対面授業とは別に、学生に週平均２時間ほどの e ラーニング教材による自習を課し、その消化率に基づく評価を対面授業の成績評価に組み入れる試みである。2003 年度のカリキュラム改編の際に、少人数クラスを設けるとともに、必修授業数を削減した。今回の新カリキュラムにおける e ラーニングによる自習は、クラスサイズ、学生の必修授業数、全開講数、教員の担

当授業数を原則的に変えることなく、学生の学習量増加を実現しようとする試みである。

④「パラグラフ・リーディング、パラグラフ・ライティング、プレゼンテーションを中心とした授業内容」は、基本方針 (5) の「英語による学術論文の読解・執筆・発表の能力の育成」のための具体的実践策である。以下に示すように、主として１年前期と後期の「英語（基礎)」(AEB)、「英語（中級)」(AEI) でパラグラフ・リーディングとパラグラフ・ライティングの能力を、１年後期の「英語（コミュニケーション)」(AEC) と２年前期の「英語（上級)」(AEA) でプレゼンテーションの能力を育成する。

３．新カリキュラムの内容

以下に新カリキュラムの具体的内容を、主として、検定試験とコース分け、授業科目、課外学習、「英語検定試験による単位認定制度」を紹介することにより示す [2)]。

3.1　検定試験と習熟度別コース分け

上述のように、新カリキュラムでは、入学時に検定試験 TOEFL-ITP と Criterion（ライティング能力を測定するオンラインの試験 [3)]）を実施し、前者の成績に基づいて、A、B、C の習熟度別コース分けを行う。また、１年終了時に再度 TOEFL-ITP 及び Criterion 一斉受験を実施し、１年間の英語学習を経た学生の実力を測定する。

３つのコースのうち、A コースは習熟度の高い学生のコースで、１年前期開講の「英語（基礎)」(AEB) を他のコースの学生とは別に受講する（ただし、時間割編成上、これができない学部では、習熟度の高い学生を対象とした「特別英語セミナー」の受講を促す)。C コースは習熟度の低い学生のコースであり、１年前期に AEB に加え、「英語（サバイバル)」(AES) を受講し、AES に合格しない限り、２年次開講授業を受講することができない。B コースはそれ以外の学生のためのコースである。

3.2　授業科目

現行カリキュラムにおける授業科目は、「言語文化 I」、「言語文化 II」、「言語文化 III」に分かれ、「言語文化 I」は、「英語（リーディング)」、「英語（コミュニケーション)」の２種類、「言語文化 II 」は、「英語（セミナー)」、

「英語セミナー（言語文化）」、「英語セミナー（言語表現）」、「中級英語（コミュニケーション）」、「上級英語（コミュニケーション）」の５種類、「言語文化 III」は「英語（ステップアップ）」により構成されている。このうち、「英語（リーディング）」は原則として 40 人授業で１単位、「英語（コミュニケーション）」、「英語（セミナー）」、「英語セミナー（言語文化）」、「英語セミナー（言語表現）」、「中級英語」、「上級英語」は原則として 20 人授業で２単位、CALL を利用した授業である「英語（ステップアップ）」は受講者数不特定で１単位の授業である。学生は「言語文化 I」授業である「英語（リーディング）」と「英語（コミュニケーション）」を履修し、所属学部（もしくは学科、系）の規程に従って、「言語文化 II」もしくは「言語文化 III」授業を選択し、履修することになる（一部の学部では「言語文化 II」もしくは「言語文化 III」授業の受講義務がない）[4]。

新カリキュラムにおける授業科目は、「言語文化 I」と「言語文化 II」に分かれ（「言語文化 III」は廃止する）、「言語文化 I」では７種類の授業が開講される。すなわち、「英語（サバイバル）」（Academic English Survival, AES）、「英語（基礎）」（Academic English Basic, AEB）、「英語（中級）」（Academic English Intermediate, AEI）、「英語（コミュニケーション）」（Academic English Communication, AEC）、「英語（上級）」（Academic English Advanced, AEA）、「英語（セミナー）」（Academic English Seminar, AESM）、「英語（上級リーディング）」（Advanced Reading, AR）である（授業名に続く括弧内は英語名称とその略語）。

また、「言語文化 II」授業では次の５種類の授業が開講される。「特別英語セミナー（ライティング）」（Special English Seminar Writing, SMW）、「特別英語セミナー（プレゼンテーション）」（Special English Seminar Presentation, SMP）、「特別英語セミナー（リーディング）」（Special English Seminar Reading, SMR）、「特別英語セミナー（検定試験英語）」（Special English Seminar Certificate Tests, SMCT）、「特別英語セミナー（専門分野）」（Special English Seminar Specific Purposes, SMSP）である。

これらの授業の内容を以下に紹介する。

3.2.1　「言語文化 I」英語授業の内容

(1) 英語（サバイバル）[AES]

○１年前期開講、40 人授業、１単位（随意科目）

１年次前期に、特に大学英語の基礎知識の不足している者に対して、基

礎知識の再確認を図るために行われる授業。入学時の検定試験の結果によりCコースとされた学生を対象とし、クラスサイズは40人を原則とする。統一シラバスの授業で、教材として、e ラーニング教材「ぎゅっと e」の文法と初級のリーディングおよびボキャブラリーを用いる。「合格／不合格」によって成績認定する（優良可不可の成績は認定せず、学部が指定する卒業必修単位数には含めない）。不合格者は１年次後期に自律学習の形で再度「ぎゅっと e」をやり直し、１年次１月に行われる TOEFL-ITP で所定の成績を収めることによって、あるいは、１年次３月に行われる再試験に合格することによって、合格評価を得ることができる。合格評価を得られない学生は２年次開講の授業を受講することができない。

(2) 英語（基礎）[AEB]

○１年前期開講、40 人授業、１単位

研究拠点大学である名古屋大学の学生にふさわしい学術的な英語を使いこなす能力を身につけるための授業。学術的な英文に関するリーディング能力とライティング能力を養成する。A、B、C コースのすべての学生を対象とするが、A コース学生向け授業は独立させる。対面授業に加え、課外学習として、「ぎゅっと e」（中級）のライティング（１セットのみ）、リーディング、リスニングを課し（週 2.5 時間）、その学習に基づく評価を授業全体の評価に組み入れる。成績は優良可不可によって認定する（ただし、A コース用クラスの受講者は原則として優良不可によって認定する）。

(3) 英語（中級）[AEI]

○１年後期開講、40 人授業、１単位

AEB 授業で学んだ英文の基本的論理構成に関する知識を用いて、より高いレベルの英文読解、英作文を行う授業。A、B、C コースのすべての学生を対象とし、コース別クラス編成は行わない。対面授業に加え、課外学習として、「ぎゅっと e」の中級ライティング（１セットのみ）と上級リーディングを課し（週 1.5 時間）、その学習に基づく評価を授業全体の評価に組み入れる。また１年終了時に実施される TOEFL-ITP の成績（リーディング・セクション）および Criterion 試験の成績を授業全体の評価に組み入れる。成績は優良可不可によって認定する。

(4) 英語（コミュニケーション）[AEC]

○１年後期開講（医学部保健学科では２年前期開講）、20 人授業、２単位

リスニングとスピーキングを主としたコミュニケーションの能力を高める授業。日常会話、さらにはディスカッションやプレゼンテーションのた

めの基礎力を養成する。A、B、C コースのすべての学生を対象とし、コース別クラス編成は行わない。対面授業に加え、課外学習として、「ぎゅっと e」の上級リスニングと中級スピーキングを課し（週２時間）、その学習に基づく評価を授業全体の評価に組み入れる。また１年終了時に実施される TOEFL-ITP の成績（リスニングとストラクチャー・セクション）を授業全体の評価に組み入れる。成績は優良可不可によって認定する。

(5) 英語（上級）[AEA]

○２年前期開講、20 人授業、２単位

学会、企業等で必要とされるプレゼンテーションを行えるよう、リーディング、スピーキング、リスニング、ライティングの各能力を高め、また４技能の統合を目指す授業。A、B、C コースのすべての学生を対象とし、コース別クラス編成は行わない。対面授業に加え、課外学習として、e ラーニング教材「Listen to Me!」（もしくは新開発教材）を課し（週２時間）、その成績評価を授業全体の評価に組み入れる。成績は優良可不可によって認定する。

(6) 英語（セミナー）[AESM]

○２年後期開講、20 人授業、２単位

英語という言語、その言語が培ってきた文化、および現代社会における英語文化についての深い教養を身につける授業。A、B、C コースのすべての学生を対象とし、コース別クラス編成は行わない。対面授業に加え、課外学習として、e ラーニング教材「Listen to Me!」（もしくは新開発教材）を課し（週２時間）、その学習に基づく評価を授業全体の評価に組み入れる。成績は優良可不可によって認定する。

(7) 英語（上級リーディング）１ [AR1]

○文学部対象授業、２年前期開講、40 人授業、１単位

AEB、AEI、及び e ラーニングによって培った英語の読解力を用いて、さらに高いレベルの、また多様な英文の読解を行うとともに、現代社会における英語文化についての深い教養を養う授業。A、B、C コースのすべての学生を対象とし、コース別クラス編成は行わない。原則として、e ラーニング教材による課外学習は課さない。成績は優良可不可によって認定する。

(8) 英語（上級リーディング）２ [AR2]

○文学部対象授業、２年後期開講、40 人授業、１単位

AEB、AEI、AR1、及び e ラーニングによって培った英語の読解力を用

いて、さらに高いレベルの、また多様な英文の読解を行うとともに、現代社会における英語文化についての深い教養を養う授業。A、B、C コースのすべての学生を対象とし、コース別クラス編成は行わない。原則として、e ラーニング教材による課外学習は課さない。成績は優良可不可によって認定する。

3.2.2 「言語文化 II」英語授業の内容

○いずれも前期または後期開講、20 人授業、２単位

上級者向けに、さらに高度な英語運用能力を身につける機会を提供するために開講する授業。検定試験の成績に基づく受講制限を設ける。取得単位を最大２単位まで「言語文化 I」授業の単位に読み替えることができる。

(1) 特別英語セミナー（ライティング）[SMW]

「言語文化 I」授業で培った英語ライティングの力をさらに高いレベルにまで伸ばすことを目的とする授業。

(2) 特別英語セミナー（プレゼンテーション）[SMP]

「言語文化 I」授業で培った英語プレゼンテーションの力をさらに高いレベルにまで伸ばすことを目的とする授業。

(3) 特別英語セミナー（リーディング）[SMR]

「言語文化 I」授業で培った英語リーディングの力をさらに高いレベルにまで伸ばすことを目的とする授業。

(4) 特別英語セミナー（検定試験英語）[SMCT]

主として留学を目指す学生を対象に、TOEFL-iBT 受験の準備などを行う授業。

(5) 特別英語セミナー（専門分野）[SMSP]

特定の専門分野の内容について英語で学ぶ授業（全学協力教員ほか担当）。

3.2.3 必修単位数別英語履修コース概要

必修単位数別（学部別）、各コース別の受講授業を表１～４に示す。いずれにおいても、AES(*) は合格／不合格によって評価し、取得単位は卒業必修単位に含めない。

表１　必修８単位の学部（教育学部、法学部、経済学部、農学部、医学部医学科）

学部	コース	I 期	II 期	III 期	IV 期
教 法 経 農 医（医）	A	AEB	AEI AEC	AEA	AESM
	B	AEB	AEI AEC	AEA	AESM
	C	AES(*) AEB	AEI AEC	AEA	AESM

前／後期
SEW SEP SER SECT SESP

表２　必修８単位の学部（文学部）

学部	コース	I 期	II 期	III 期	IV 期
文	A	AEB	AEI AEC	AEA AR1	AR2
	B	AEB	AEI AEC	AEA AR1	AR2
	C	AES(*) AEB	AEI AEC	AEA AR1	AR2

前／後期
SEW SEP SER SECT SESP

表３　必修６単位の学部（工学部、理学部、情報文化学部）

学部	コース	I 期	II 期	III 期	IV 期
工 理 情	A	AEB	AEI AEC	AEA	
	B	AEB	AEI AEC	AEA	
	C	AES(*) AEB	AEI AEC	AEA	

前／後期
SEW SEP SER SECT SESP

表４　必修４単位の学部（医学部保健学科）

学部	コース	I 期	II 期	III 期	IV 期
医（保）	A	AEB	AEI	AEC	
	B	AEB	AEI	AEC	
	C	AES(*) AEB	AEI	AEC	

前／後期
SEW SEP SER SECT SESP

3.3　課外学習（e ラーニング）

前述のように、新カリキュラムでは、「言語文化 I」授業において、個々の対面授業に e ラーニング教材（「ぎゅっと e」、「Listen to Me!」もしくは新開発教材）を用いた課外学習が課され、学生は対面授業 1 コマにつき週約２時間の課外学習を行うことになる（ただし、AES では、授業内で e ラーニング教材を用い、これに加えて同一教材による課外学習が課される。また、文学部対象 AR1、AR2 には課外学習は課されない）。課外学習の評価は個々の対面授業全体の成績の中に組み入れられる。

「ぎゅっと e」は広島市立大学が産学連携によって開発した e ラーニング教材である。基礎、初級、中級、上級の４レベルに分かれ、リーディング、ライティング、リスニング、スピーキング、ボキャブラリー、文法という５分野における、オンライン上の練習問題および解説が提供される [5]。学生はインターネット上のサーバーにアクセスして、各自で問題を解き、解説を読んで学習を進める。インターネットに接続された自宅のパソコンもしくは大学施設（CALL 教室、サブラボ）内の端末を用いて、課外学習を進めることになる。

「Listen to Me!」は文部省メディア教育開発センターの出資によって開発された CD-ROM 教材で、「College Lectures」、「People Talk」、「TV News」、「Movie Time」の４コース（CD-ROM５枚）、および、これらに追加された「College Life」、「Introduction to College Life」がある。

新カリキュラムにおける「言語文化 I」各授業で行う課外学習の概要を表５にまとめる。（なお、次の略語を用いる。G: Grammar、R: Reading、V: Vocabulary、W-1、W-2: Writing、L: Listening、S: Speaking。）

表５　言語文化 I 各授業における課外学習

科目名	開講時期	課外学習
AES	１年前期	ぎゅっと e（初級）G、R (V)
AEB	１年前期	ぎゅっと e（中級）R、W-1、L
AEI	１年後期	ぎゅっと e（上級）R、（中級）W-2
AEC	１年後期	ぎゅっと e（上級）L、（中級）S
AEA	２年前期	Listen to Me! もしくは新開発教材
AESM	２年後期	Listen to Me! もしくは新開発教材
AR1	２年前期	なし
AR2	２年後期	なし

なお、AES を除き、これらの課外学習における学習者への質問の対応や学習状況のモニタリングは、原則的に、対面授業の担当教員ではなく、新設の「アカデミック・イングリッシュ支援室」が一括して行う。

3.4　英語検定試験による単位認定制度

名古屋大学では、「外国語教育における客観的到達レベル提示」、「外国語教育における自律的学習のための動機づけ」を目的として、平成８年以来「英語検定試験による単位認定制度」を実施してきた（平成８年度に試行開始、平成 10 年度より本格実施）[6]。新カリキュラムにおいてもこの制度は維持され、入学時と１年終了時に実施される TOEFL-ITP とは別に、学生が独自に受験した検定試験（「英検」、「工業英検」、「国連英検」、「TOEFL」（CBT、PBT、iBT）、「TOEIC」、「ケンブリッジ英検」、「IELTS」）の成績を、「言語文化 I」もしくは「言語文化 II」の単位として認定する。ただし、新カリキュラムにおいては、カリキュラム全体のシステムが変更されるため、その整合性の見地から、従来、検定試験の成績に応じて２単位、４単位、６単位が認定されてきた単位数を、２単位と４単位のみの認定に改めることとなった。

４．若干の考察

新カリキュラムの内容は概略上記の通りであるが、最後に、新カリキュラムと現行カリキュラムの相違点の一部について、若干の考察を記す。

(1) まず、現行カリキュラムにおいて、検定試験の利用は「英語検定試験による単位認定制度」に限定されていたが、新カリキュラムでは TOEFL-ITP と Criterion の２度の一斉受験により、全学生を対象とする、より大規模なものになる。前述の通り、これにより、学生の英語力の認識が、また（部分的ではあるものの）授業における成績評価が、「世界的尺度」により位置づけられることになる。このことは、名古屋大学における英語教育を経た学生が、自ら、自身の英語力を様々な基準に当てはめることを可能にするものである。例えば、米国などの海外留学に必要な英語力が自分にあるか否かを容易に知ることができるようになるし、また、自身の英語力をいくつかの企業における昇進の条件に照らし合わせることも可能になる。TOEFL-ITP と Criterion によって測定可能な英語の力は限られた

領域のものであり、検定試験のスコアアップのみを目指す英語教育は避けられねばなるまいが、学生が社会的に認知された客観テストのスコアを持つことは、名古屋大学での英語学習と社会・世界とのより強い連続性をもたらすことになるだろう。また、検定試験によって自身の客観的な英語力を知ることは、英語学習の強い動機付けにつながることにもなるだろう。

(2) 入学時に習熟度別のコース分けを行い、C コースの学生が所定の成績を収めない限り AES に合格できず、また２年次開講授業を受講できないとすること、つまり、最低限の出口保証を試みることも、現行カリキュラムからの大きな変更点である。このことは、中央教育審議会「教育振興基本計画について」に示された「教育の質の保証」（中央教育審議会、2008、7）の提言に合致するものでもあるが、他方で、英語を苦手とする学生に多大なストレスを生む可能性、あるいは、入学してくる学生の平準化を招く可能性（例えば、英語は苦手でも物理は得意な学生が受験を回避する）など、考慮すべき点がないとは言えない。新カリキュラム実施に際しては、合格レベルを比較的低めに設定してあるが、これらの点についての注意を怠ることはできない。

(3) e ラーニング教材を用いた課外学習による学習量の増加も新カリキュラムで初めて導入されるものである。すでに種々の教材を利用した e ラーニング授業を実施している大学もあり、また、名古屋大学においても、「言語文化 III」授業において、また、一部担当教員が独自に e ラーニングを実施しているが、新カリキュラムでは、英語における e ラーニングを名古屋大学では初めて、全学生を対象にして、システマティックに実施することになる。名古屋大学の実施方法の特徴は、AES を除き、e ラーニングを自習として行うこと、また、学習者からの質問への対応や学習状況のモニタリングを、原則的に、対面授業の担当教員ではなく、新設の「アカデミック・イングリッシュ支援室」が一括して行うことにある。e ラーニングを自習として行うこのラディカルな方法は「全学教育検討 WG」による「報告書」に示されたものである。（ただし、この方法を用いなければならぬ理由は示されていない。）本稿執筆時において、当支援室の体制が確定していないことは不安材料ではあるが、新カリキュラム実施までに円滑な運営を行うための十分な準備がなされねばならない。

(4) 授業内容の中心にパラグラフ・リーディング、パラグラフ・ライティング、プレゼンテーションを置いたことも新カリキュラムにおける大きな特徴である。前述の通り、「報告書」には、「本学の学生に要求される英

語力」が、「専門書を読み、論文を書き、また学会などで学術発表ができること、また、卒業して社会に出たときに種々の職場で仕事の道具として使いこなせること」として示されている。この見解を踏まえれば、授業内容をこのように特化することは十分な説得力を持つと言えるだろう[7]。

(5) ある研究者は、「実用のコミュニケーション能力」を TOEFL-PBT（TOEFL-ITP）で 580～600 点程度をクリアすることとしている（竹蓋、n.p.）。そのレベルに到達するには、基礎的な文法・構文理解、語彙力の増強に加え、高い学習意欲と学習量の大幅な増大が不可欠であろう。新カリキュラムにおいて意図された学習量の増大は、もしそれが想定通りに実施されたなら、英語力の少なからぬ上昇をもたらすものと期待される。しかし同時に、学生の学習意欲を高めることも極めて重要である。そもそも意欲がなければ課題として課せられる学習に取り組むことも困難であろう。また、たとえ与えられた課題をこなしたとしても、多くの学習者にとっては、上記研究者が言うレベルの「実用のコミュニケーション能力」が獲得されるとは限らない。そのレベルに到達するためには、さらなる学習に向かう意欲が不可欠である。学習意欲を高める工夫は現状ではまだ十分とは言えない。今後のさらなる研究が望まれるところである。

注

1) 新カリキュラムの方針決定に至る経緯が不透明であること、また、方針を採択・提示した「全学教育検討 WG」に語学担当教員が含まれないこと、採択の理由が明確にされないことなど、この「報告書」に関する問題は多いが、ここでは立ち入らない。なお、筆者は「英語教育改善に関する実施体制 WG」委員として、同「報告書」の内容を円滑に実施する立場にあり、本稿では「報告書」に示された内容を評価することは差し控える。
2) 以下の記述は「英語教育改善に関する実施体制 WG」作成中の「国際基準の英語力を目指して—英語新カリキュラム実施案（ver. 5）」に拠る。本実施案（ver. 5）は、本稿執筆時点ではまだ公開されていない。
3) Criterion 試験の詳細については、http://www.cieej.or.jp/toefl/criterion/navi.html を参照のこと。
4) 詳細は参考文献中の名古屋大学『全学教育科目履修の手引』75-77 を参照のこと。また、授業科目の「開講の目的とねらい」に関しては、同 97-98 を参照のこと。

5) 教材の詳細については http://gyuto-e.jp/school/infomation/learning/study.html を参照のこと。
6) 現行制度の詳細については、名古屋大学『全学教育科目履修の手引』78-79 を参照のこと。
7) パラグラフ・リーディング、パラグラフ・ライティング、プレゼンテーションの訓練が有益であることは間違いないが、(話をリーディングに限っても) 英語で書かれた文章は学術論文もしくは論説文に限られるわけではない。学術的英文・論説文以外の種類の英文をも、広く、ときにはじっくりと、文法事項や文の構造を確認しながら読むことで、英語という言語とその背景についての習熟度を高めることが可能となり、ひいてはそれが学術的英文を含む英文一般の読解力と表現力を高めることになる、というのが筆者の考えである。

参考文献

中央教育審議会、2008、「教育振興基本計画について－「教育立国」の実現に向けて（答申案）」、1-42。
“Criterion.” (http://www.cieej.or.jp/toefl/criterion/navi.html、2008.11.1.)
名古屋大学、2008、『全学教育科目履修の手引』。
竹蓋幸生、「システムの構造」。(http://www5e.biglobe.ne.jp/~takefuta/3step/sots.html、2008.11.1.)
全学教育検討 WG（名古屋大学）、2008、「英語教育の改善について－国際基準の英語力を目指して（報告書）」、1-12。